



学生への経験の機会提供とレーザーの重要性

中村 大輔†

Providing Students the Opportunity to Gain Experience and Importance of Lasers

Daisuke NAKAMURA†

本稿を執筆している7月において、東京ではCOVID-19の感染拡大によって4回目の緊急事態宣言が発令される中、東京オリンピックを間近に控えている。各地で海外からの選手の受け入れが進められている一方で、飲食店での酒の提供停止要請をめぐって日本政府の対策が迷走しているように見受けられる。各国のワクチン接種率の違いに起因する個人個人のCOVID-19に対する姿勢も様々であり、いよいよ混沌とした様相を呈してきたが、こんなときこそリーダーの舵取りが重要になってくるだろう。

大学で仕事をする自身の環境に目を向けると、講義に関しては遠隔授業を強いられる状況となって1年以上が経過し、最近では対面授業が復活してきている状況にあるものの、定常状態になりつつあるといったところである。一方、研究室活動においては、レーザープロセッシングに関する実験系の研究に従事している身として、遠隔では実験のしようもなく、感染対策と人数制限を設け、学生さんの協力のもとで実験を進めている状況である。コロナ禍前までは定期的で開催していた研究室飲み会や旅行は1年以上開催できていない。お酒を飲みながら楽しく話すのが好きな私にとって何とも寂しい思いがあるのと同時に、学生さんにおいては学生時代ならではの様々なイベントが制限されてしまっていることを考えると胸が痛む思いである...と、主観でつらつらと述べてしまったが、教育に携わる人間として「現状を踏まえて学生さんに何を提供できるか?」という問いに対してコロナ禍前に比べて具体的に何も変化できていない自分を見ると、冒頭の日本政府のリーダーシップと重なり、今こそ自分の舵取りが重要なことを突き付けられていることに気づく。アクティブに活動されている先生を拝見すると、遠隔会議を活用した他大学の先生とのディスカッションを通じて共同研究を結び、研究室間の知の共有と人的交流を実現する仕組みを構築しておられる。感染しない・させないために「動かない」のではなく、ツールを駆使して積極的に「行動する」(=経験値を積む)ことの大切さを学ばせていただいている。

一方、1研究室の取り組みだけではどうしようもないイベントの1つが学会会議での発表である。コロナ禍前は大きな会場で大勢の前でプレゼンする場が当たり前のようにあったが、今では開催される会議のほとんどはオンライン開催でPC画面に向かってプレゼンする姿が当たり前となった。自身の学生時代を振り返れば、修士2年の時に初めて国際会議に参加し、英語の質問に対してしどろもどろに回答したこと、恩師について行って企業の社長様に高級料理(フカヒレ姿煮など!)をごちそうになったことなど、今の自分を形成する大きな経験として刻まれている。学会会議に限ったことではないが、こういった経験の機会を提供することが大学教員として学生さんにできることだと感じる次第である。ワクチン接種が進んでいることもあって学会会議のオンサイト開催も復活しつつある。コロナ禍がこのまま収束するとは考えにくい、学生さんの経験できる機会が少しでも多くなっていくようにできることから取り組んでいきたいと思う。

さて、ここまでレーザーの話が全く出てこなかったが?とお気づきの方がおられるかもしれない。最後に妻との会話をひとつ。最近の妻のもっぱらの興味は美容であり、「ピコ秒レーザーでお肌のシミが取れるみたいよ。実験室でできたりする?」と私にそれとなく主張してくるところからも、レーザーの身近な重要性を感じずにはいられない(笑)。

†九州大学大学院 システム情報科学研究院(〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡744)

† Graduate School of Information Science and Electrical Engineering, Kyushu University, 744 Motooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395